

『和讃のころ ～阿弥陀仏～』

十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなわし
撰取して捨てざれば 阿弥陀となづけたてまつる

『浄土和讃』弥陀経意第一首目

もう何年も前のことであります。名古屋別院にお世話になっていた頃のことです。別院に常駐しておりますと電話が鳴りましたので電話を取らせて頂く。そうするといきなり「ああお寺さんお見えになったか。ちょっと教えてほしいのですが。」と名前も言われずにいきなり申されましたので、私自身は名前は言うべきだと思ったもんですから「申し訳ありません。どちらのどなた様ですか。」とお聞きしました。そうしますと「〇〇町の〇〇です。今度13回忌のお世話になることになっています」とお答えくださったので、「はいわかりました、お世話になります。どんなことでお困りなのですか？」とお聞き致しました。そうしますと「13回忌の親戚につける記念品を記念品屋さんに探しにきたのですが、あまりにもいろんな種類があるので頭がごちゃごちゃになってどうしていいかわからなくなってしまったのです。お寺さんならいろんなところで記念品をみておられるだろうからアドバイスをして欲しいのです。」こう仰るんです。これ結構困るんですね。「こういったものもいいですよ」と言えば、これが欲しいということになってしまいます。言い方が非常に困るんですね。当時は、今の時代のようにカタログなどない時代であります。そこで考えて申し上げたのでは「以前は形があるものをつけられる方が多かったです。例えば、コップやカップ、お皿、鍋、人によっては土鍋などもありました。ただこういったものは最近あまりやられる方は少ないように感じます。どちらかといえば、形があるものより形がなくなるもの、つまり食用のもので、油、サラダにつけるドレッシングなどをつけられる方が多いようで、評判がいいみたいですよ。」と誰の評判がいいかというと家の嫁が「あれは有難い」と言っておったことなんですけどね。そんなことを申し上げさせて頂きますと、「有難うございます。参考になりました。考えてみます」と仰ってくれました。そうなりますと、私の心の内には「今度のお年忌には油かドレッシングがもらえるかな」と思いながら、さて電話を切ろうかなあと思っていると、「もう一つ聞いてもいいですか」と言われたんです。ですから「なんでしょうか？」とお聞きしますと、「この記念品でお寺さんにもつけるものなのではないでしょうか？」と言われたんです。それはそれは、返事に困りました。「つけなくてもいい」と言ったらもちろん頂けませんので、頭をひねって考えまして、「これは私どもがあれこれいうものではないでしょうが、つけられる方はつけられますし、つけられない方も中にはおるにはおられますよ。」と、そういう風に言いましたら、「はい、わかりました。じゃ、つけなくてよろしいですね。」と言われてしまい、絶句してしまいました。そして、そのまま電話をお切りになられました。その方の13回忌のご法事の日を迎えました。正直どうなるかなあと思いましたが・・・結局何にも頂けませんでした。

その13回忌があったのは今からもう十数年前。そのことを未だに忘れない私。つまり欲の塊であります。私たちが日々走りまわっているのも欲があるからだとも言われています。欲のない人なんていないと思います。その欲は、何万もあり、仏教では八万四千あると言われるのですが、そういった何万もある欲を大きく五つに分けて、「五欲」と言います。この五欲を一つずつ説明致しますと、まず財欲。お金が欲しい、物が欲しい、ということであります。まさに物が欲しい、ドレッシング・油が欲しいと願う私は財欲であります。次に色欲。男性が女性を、女性が男性を愛することです。何歳になってもこういうのは続くと聞いております。飲食欲とは、おいしいものが食べたいという欲。おいしいものを食べればまたどんどん、どんどんエスカレートしておいしいもの

が食べたくなるんですね。そして名誉欲。人より上に立ちたいという欲。いま五月が運動会の季節なんですね。名古屋の方はまだ10月にされているところもあるかもしれませんが、私がおる岡崎はほとんどが5月に行うんです。でそのシーズンに、ある方からこんな川柳を教えてくださいました。どんな川柳か。「運動会 抜くなその子は課長の子」。要するにたまたま同じ学校の同級生に上司の子供がいて、一緒に走るようになった。ほんとは自分の子供に勝たせてあげたいが、その課長の子供を抜いてしまうと課長の機嫌が悪くなってしまう。そうすると自分の昇進に響いてきてしまう。複雑なサラリーマンの立場を表している川柳かなと思ったわけです。やっぱり自分の立場が危うくなると思う気持ちの中には、人より昇進したい、上に立ちたいという名誉欲があるのではないのでしょうか。最後に睡眠欲。これは寝たいという欲。最近では、気温も高くなって、昼ごはんを食べた後はむくむくとその頭を持ち上げてくるんですね。これからみなさんにはこの睡眠欲に立ち向かってもらうわけですが、なるべく頑張って睡眠欲をやっつけて戦って聞いて頂きたいなあと思うわけです。こういった五欲を持ち合わせた欲だらけの私たちであります。これがどういうことを表しているか。自力では救われる、あるいは助かる。ということにおいてどうにもならない私たちである、ということがこの五欲を通してお教えられているのではないのでしょうか。だからこそ先月申し上げたご本願、本願力にお任せするしかない。

先日、中学校の役を一つやらせてもらうことになりました。後日、その地域の中学校に行き、校長先生と会ってきました。校長先生といろいろな話をする中で、校長先生が外国から留学生を迎えたんだけど、この留学生が「日本の文化を見たい」と言うそう。そこで校長先生、日本の文化と言えば、神社とお宮。でさっそく神社とお寺に案内したそうです。そうして案内する中で、この留学生が「神社とお寺はどう違うんですか？」と聞かれたそうです。校長先生は、「この質問に対して答えることができなかった」と仰いました。皆さんは如何でしょうか？

そこで私は先生にこう申し上げました。「英語や外国語で説明しなさいと言われたらよう説明できませんが、日本語でいうならばこの説明は簡単だと思います。」と。すると先生は「教えて下さい」と仰たんです。「じゃあ一言で申しますね。神社は願う場所、お寺はお願いにあう場所、という一言に尽きると思います。寺はお願いにあう場所、それも自分勝手の得手勝手の都合の願いではなく、仏様の願い。全ての人を必ず救うというご本願に合う場所がお寺なんです。」と言いますと、先生は首を傾げられましてよくわからんという顔をされたので、その場ではあまり時間がなかったので「一度ゆっくりお話ししたいですね」とお別れさせて頂きました。寺はお願いにあう場所、その願ってくださっている仏様を阿弥陀仏と言います。今日はサブテーマで阿弥陀仏とさせて頂いております。阿弥陀仏とは、どんな仏様なのかということは今から和讃を通して一緒に考えさせて頂きたいと思えます。

資料を見てください。浄土和讃弥陀経意一首目であります。

「十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなわし 撰取して捨てざれば 阿弥陀となづけたてまつる」

現代語訳をしますと、「東西南北の四方、さらに東南、東北等を加えて八方、下方、上方などあらゆる世界にたくさん念仏の衆生がいる。この名号のおいわれを信じて念仏する衆生を照覧なさせて、光明の中に撰取してお捨てにならず、必ず往生成仏させて下さる如来さまゆえ、阿弥陀仏とお呼び上げるのである。」となります。続いて語訳を致しますと「微塵」とは、一つには非常に小さい物質のこと。二つには細かに砕かれたもののように数の多いことを意味します。今は数の多いことを表現しています。「撰取してすてず」は、如来の光明の中に撰取不捨されること。「撰取」とは、栄養撰取などというように「撰」は種類の異なるものを取り込むこと、「取」は同化して自分のものにする、と辞典にあります。だから如来の撰取は、善悪、男女を選ばず異なったものを平等に如来の光明の中に取り込み、如来に同化するはたらきなのです。即ち光明の中に取り込み、正定聚（＝必ず浄土に往生して佛にならせて頂く位）に住せしめて下さるのである。こういったことを読ませて頂きますと、阿弥陀仏とはすべての人を必ず救うという願い＝本願をたて、はたらき続けて下さっている仏様のことです。こ

れが第一の阿弥陀仏です。今日は四つほど阿弥陀仏とはこういう仏様というのを挙げさせていただきますので、後でまとめていきますね。

先ほど名古屋別院にお勤めさせて頂いて、よく電話があるというお話の一部を紹介してもらいましたが、ほんとにさまざまな電話があるんです。一般的によくあるのは「お布施はいくらくらい包めばいいんですか？」という質問です。私は「自分のお寺の住職にお聞きください」と答えます。逃げておるんですね。実際は答えにくいものが多いんです。そんな中印象に残っている質問があります。これも十数年から二十年位前のことになります。電話がかかってきて、「お寺さんお見えになりましたか。ちょっと聞きたいことがあるんですが。今親戚の者が集まって兄弟もいるんですが、兄弟の中でご本尊のことで話をさせてもらっているんです。けれども、兄弟の話の中で意見が食い違ってしまう話があるんです。」と言われますので、「どんなことでしょうか。」とお聞きしますと「阿弥陀さんは雄ですか？雌ですか？」と聞かれてしまいました。ひどい言い方ですよ。獣ではないんだし。生物学的に男性か女性かということなんでしょうが。皆さんはどのようにお考えになりますか。

阿弥陀仏というのは、本来色や形をもたないんですね。色や形を超えた存在なんです。ですが、私たち人間は形がないとなかなか手が合わさらないんですね。全てのものを超えるはたらき、自分たちにとって尊い姿を阿弥陀仏という形にさせて頂いて手を合わさせて頂く。そこで、自分たちにとって一番尊い姿は何か？といたしますとお釈迦様なんですね。浄土真宗ではこんな風に考えます。お釈迦様は苦行を終えられて浄土悟りを完成させている。初めは一人で悟りを楽しんでいたが、しばらくするとこの悟りを人に伝えるかどうか、説くかどうかを非常に悩まれたそうです。なぜか。あまりにもその真理が難解で難しいものだから、そのことを伝えるにあたって逆に混乱を招くのではないかと思って悩みに悩まれたそうです。そんな時に梵天勧請が人に説くことを勧めます。梵天勧請は、自分だけ悟って他人は悩み苦しんでいるのは関係ない、というのは、それは本当の悟りにならないと説かれ、お釈迦様はこのことを自覚されて、説法の決心＝伝道、つまり初転法輪ですね。この教えを伝えることにされたのです。梵天勧請というのはインドの最高の神として知られるのですが、この梵天として伝えられる話は、全人類の代表ということを、梵天で表されているんですね。そして、ついに伝道を決心し立ち上がったお姿。私たち浄土真宗の門徒が阿弥陀様をお敬いするのは、お釈迦様のこの立ち上がった時のお姿が一番尊いとして、そのお姿を頂いているんです。浄土宗や他宗は、阿弥陀様の座った姿がありますが、真宗のご本尊が立ち上がった姿をされているのは非常に大切な意味があるんです。その阿弥陀仏、姿や形を超える存在なのでありますけれども、一応お木像や絵像で拜ませて頂く阿弥陀様は釈尊の姿が基本になっているんです。

釈尊と阿弥陀仏の違いというならば、釈尊は今から約二千五百年前にインドで生まれた歴史上の人物でありまして、その釈尊が三十五歳にさとりを開いて仏陀＝真実に目覚めた者、つまり仏になったのです。阿弥陀仏は、歴史上の人物ではないんです。また偶像でもありません。真実の世界から、真実を知らせるために、人格的に現れて下さった仏様なんですね。ですから、先ほどの別院のお話では、お釈迦様は歴史上の人物ですから男か女であれば、男です。また阿弥陀様においては、そういったことをすべて超えた仏様なんですと説明させて頂いたと記憶しています。方便法身とって、方便といいますのは仮の姿、法身は永遠の真理、つまり仏さまであります。この仏というお姿を伝えて下さるのが方便法身なのであります。

先ほど阿弥陀仏のところ、真実の世界から、真実を知らせるために、人格的に現れて下さった仏様と述べましたが、真実とは何か。真実は、真実でない在り方を破るはたらきであります。真実でない在り方とは、嘘のことです。つまり、真実とは嘘を破るはたらきなのです。嘘は真実によって破られるんですね。例えばですね、私が女装をして私は女ですといっても、男であるという事実によって、女装して女性であるというウソは破られるわけです。男性であるという事実によって女性であるという嘘は破られます。これと同じように、私は誰の世話にもならず一人で生きていくと言ったって、実際は私たちのあらゆるものつながりあいでも生かされてある命

であります。その真実によって、私は誰の世話にもならず一人で生きているという嘘は破られます。つまり、真実がどこにあるかということではなくて、真実でないものを真実に導くはたらきをする真実とはそういった性質があるんです。その真実のはたらきこそ阿弥陀仏であり、色や形ではなく、物質的でなく、人格的に現れて下さった真実に導くはたらきを離れて阿弥陀仏は存在しないのです。如来とは、仏のことを如来とも言います。如来とは、真実の世界（真如）から、真実を知らせるために来た方ということであります。真如の「如」と真実を知らせるために「来」た方の二字をとって如来というんです。

もう少し考えてみまして、阿弥陀とは、インドの言葉を中国に持ちかえるときに、意味のない漢字に音だけ写したもので、「アミダ」です。これを音写といいます。ですから阿弥陀という漢字の意味は音写であるのでまったく意味がないんです。意味を考えてみますと、「阿弥陀」の「阿」は否定の「無」という意味、「弥陀」は「はかる」という意味、ですから「阿」＋「弥陀」は「量ることができない、量りきれない」ということ。「阿弥陀」は「アミターバ」・「アミターユス」の二つの語の意味を含んでいます。「アミターバ」は限りないひかり、「アミターユス」は限りないいのちのことです。「ひかり」は智慧を表します。智慧とはありのままにものをみる力のことです。いのちは、慈悲を表し、慈悲とは本当の憐れみ慈しみの心のことです。よって阿弥陀仏とは、限りないひかりといのちの仏、限りない智慧と慈悲の仏という意味であります。

そこで、ひかりといのちとは何かを考えてみます。ひかりとは、真実を見せてくれる智慧のひかりです。真実を見せてくれる智慧の光とは、私たちの人生は思い通りにならない人生ということを教えて下さいます。例え話を出してみますと・・・

私、お年忌の席で、上座に座らさせられるのがとても嫌だったんです。何で嫌だったか。大先輩が横に座るのでどうも居心地が悪い。居心地が悪い中で、先輩たちの話を聞いていると非常に楽しみにもなってきた。いろんな話を聞かせてもらう中で、こんな話を聞かさせて頂きました。

「お寺さん、あなた何か学生時代運動はやられていたんですか？」

「はい、下手なりに中学高校と野球部に所属していました。」

「野球部は厳しいかね？」

「はい、甲子園狙うような学校に比べれば楽なんでしょうが、それでも失敗すると時々尻バットをされたり、ビンタをされたりすることもありました。」

「ああ、そうですか。それでも厳しいんだろうけど、軍隊に比べればそんなことは厳しいうちには入らないですね。」

そのとおり、間違いありませんね。そこでその方は私に軍隊の時のことを教えて下さったんです。その方が軍隊に行かれた時に、まずは班長さんから軍服と靴をもらったそうです。そして帰ってから軍服を着てみるとダボダボ、これはしょうがないが困ったのが、靴はガバガバ。これは歩けないからと思って班長さんのところに持って行って、こう言われたそうです。「申し訳ないけれども、靴のサイズがどうにも合わないので交換してください。」と言った瞬間、大変な勢いで怒られて殴られたんです。「天皇陛下からの賜りものを変えてくれとは何事だ！足の方を靴に合わせろ！！」本当にボコボコにされて厳しかったよ、という話でした。とても理不尽なことだと思ったけれども、しかしそのうち足の方を靴に合わせろという意味が分かってきたとその方は言われるんです。私、頓珍漢で聞いていても意味が分からなくなってしましまして。「こんな理不尽な話無いじゃないか、今の時代じゃ通用しないぞ。陸上選手なんで足に靴を合わせているくらいじゃないか」と思っていたんです。足の方を靴に合わせるのは無茶な話だと思いつつも聞いておりますと、さらにこう言われました。「靴の方は確かに合わなかったんだけど、それを工夫して紐を強く縛って先を詰めて、だんだん合わないなりに歩けるようになって使えたんです。そんな時に思ったのが、足に合わない靴は他になんぼでもある。ということだった。」とお教え下さいました。つまり自分のサイズに合わないものはいくらでもあって、それを「これはもう合わないから。」と言って変えてしまうのは簡単なことあります。例えば、今離婚が多いんですけれども、お嫁さんをもって

も気に入らないからサッと別れてしまう、ということが日常茶飯事であります。簡単のように見えるけれども、これはすごい問題だと思いませんか？サイズが合わないのは当たり前なんだから、そのサイズを合わせるように努力しているのだろうか、と思うんです。お嫁さんの方も、嫁入りしてきてサイズが合わないから、自分のサイズを押し通しても上手くいくわけがない。だからこそ、お互いがお互いのサイズを合わせるように努力する必要があるのではないか、ということと言われるんです。もっというならば、絶対にサイズが合わなくても履き替えることできないものがあるんじゃないでしょうか。それは、自分自身であります。特に老・病・死。これらは嫌だと思っても絶対に履き替えることはできないでしょう。

先日、研修会の途中に携帯が何回でも鳴るんです。ブルブル鳴るので「うるさいなあ」と思っていたのですが、この研修が終わるまで取ることはできないので、ほかっておいたんです。そして、ようやく終わってから携帯をみるとビックリしました。着信・メールがものすごい数で入っていた。なんだろうと思って連絡しますと、私の仲のいいソフトボールチームの仲間、お寺からすぐ近くの48歳の友人が亡くなっていたんです。長男さんは大学一年生になったばかり、二男は高校生、三男は中学校三年生。そんな中で毎日働いて一生懸命やったりしました。お酒が好きでした。その日も帰ってきてから夕方お酒を飲んで、家の中で寝ておったそうで、奥さんが「お父さん、こんなところで寝ていたら風邪ひくよ」と叩いたら、もう動かなくなっていたそうです。その後、わたしにもすぐ連絡をくださったそうです。もともと神道らしいですが、私と彼との付き合いもあったことから、うちのお寺に葬儀を頼んで下さいました。それを聞いて私も飛んで帰って枕経に行かせてもらったんです。これは、その家族からみれば、受け入れ難きことであります。ほんとに大混乱の中で、事実を事実として受け入れることもできないどころか、泣く暇もないくらいで、いまやっとお葬式が勤められて初七日まで終わった状態です。まさに足に合わない靴を無理やりに履かせられたことになったと思います。足に合わない靴を無理やりに履かせられて、では合わないまま行くのかということ、そうではない。その靴に少しでも自分の足のサイズが合っていくようにと、はたらきかけて下さるはたらきを智慧のひかりと言っていいと思うんです。まさに智慧です。で、その智慧のひかりに照らされることによって真実に出会っていく。受け入れ難いことでありますが、その真実に出会っていく中で、力強く人生を歩んでいくことができるのだと思います。私たちは、その智慧の光をお蠟燭・お灯明という形として頂いている訳です。

限りないのち、智慧のひかりによって、自分さえよければという小さいのちの世界が破られて大きなのちの世界が開けてきます。そこに他の苦しみや悲しみを共感することから起こってきます。慈悲のところが生まれる。この慈悲のころの事を、「限りないのち」と、このように頂いています。さらに、この限りないのちのことを慈悲という言葉で教えて頂いています。この智慧と慈悲に目覚めた仏のこと。この仏をブツとも呼びます。ブツとは、仏陀の音写。仏陀を省略したもので真実に目覚めた者という意味。自らが悟って終わりではなく、迷い苦しんでいる者を悟らせる者、つまり自覚覚他の者であります。自らが悟り、他を悟らしむ、ということでもあります。阿弥陀仏とはどんな仏様か、という事をいろんな表現によってできるわけですね。

「摂取」という言葉があります。「摂取してすてざれば～」の「摂取」ですね。この「摂取」の左訓には、「ひとたびとりて永く捨てぬなり。摂はものの逃ぐるを追はへ取るなり」とあり、説明書きがされています。一度取って、永く捨てない。そして、逃げて行ってしまうものを追っかけて下さって救いとってくださいのわけです。このお姿が阿弥陀仏なのです。

そうしていますと、木村無相さんを思い出します。みなさま、ご存知ですか？念仏者であり、詩人でもありますので、この法話会でも何回かご紹介させて頂いたこともあるのですが、どんな人生を歩んできたかは申し上げたことがなかったと思います。木村さんは、昭和59年1月に80歳で福井県の武生の老人ホームで浄土に往生されました。幼い頃は、両親、言うなれば父親の仕事の都合で満州に渡りました。ですが、この父親が無茶苦茶だったそうです。どのように茶苦茶だったのか。飲む、打つ、買う、と三拍子揃踏みの無茶苦茶な夫婦生活の中で、

さらに浮浪の人生。あっちへ行ったり、こっちへ行ったりの繰り返し。だいぶこれでぐれてしまったらしいです。14歳の頃、家出をして平壤に渡ってかなり無茶苦茶の人生を歩みながら、17歳の時に単身日本へ帰国しました。その「14、15、16歳の時、こんなことを考えていた」ということをご自身の著作「求道六十年歎異抄を生きて」に書かれてありましたので、コピーをして紹介させていただきます。

「たのみもせんのに、こんな世の中に産んでくれやがって、自殺するなら、先ずジジイ（お父さん）とババア（お母さん）を殺してから、そのあと、薄情な世の中の奴らを5、6人は殺して死ななければ引き合わん」と15、16の頃には、表向きはおとなしい子といわれながら肚ではそんなことを考えていた私でした」と。自分で仰っています。秋葉原の事件もこんな気持ちだったのかなと思います。一つ間違えればあんな事件を起こしかねない、そういった木村少年でした。17歳で単身帰国し、また荒れた生活をしながら、20歳の頃ふとしたことで親を醜く恨む自分の根性に驚いて、そんな他の人を恨んでばかりいる自分が嫌になって道を求めます。そこで宗教に興味を持つようになります。それでも二度の自殺未遂を経て25～29歳の時、フィリピンの開拓地に渡って働くんですが、「俺の助かる道はどうやら仏教にある」と考え帰国して、四国お遍路の旅に出かけました。そして戻り高野山真言宗に入って、自力の修行に励む。徹底的に厳しい修行をするとともに、真言宗の若い修行僧の世話をしながら頑張るんですが、自力の壁にぶつかります。ですから、宗旨を変えて真宗の教えを聞くようになる。しかし真宗の教えに納得がいかず、また真言宗に戻る。真宗に戻る。また真言宗。3回も真言宗と真宗を行ったり来たりしたんです。50歳半ばで自分のお粗末なものには真宗しかないと思われて、東本願寺のいつも聴聞ができる同朋会館の門衛となって、聴聞の生活に入られます。ここで、お念仏に遇われるんですが、それでも納得できないことがいくらかでもあったそうです。「弥陀を頼め」といっても頼めない自分がいる。「本願を信ぜよ」と言っただけで信じることもできない自分がいる。「自己に目覚めよ」と言っただけで目覚めることができない自分がいる。苦しみぬいておる中で、念仏往生の願＝阿弥陀様の根本の願い＝ご本願、つまり「我が名を称えよ、必ず救う」との教えに出遇われたのです。頼むことができなくなったり、信じることができなくなったり、目覚めることができなくなったり、自力のここから離れることができない私たちであるのに、その私たちこそ、助からぬ者をこそ、お助けくださるのが南無阿弥陀仏であるという教えに出遇われたのであります。その南無阿弥陀仏を称える、このことのみで必ず救うぞ、という願いを立てて下さったのです。その念仏往生の願、つまり南無阿弥陀仏に照らされながら、念仏の生活を送られて80歳の生涯を終えられました。助からぬ者をこそ助けるといふ念仏往生の願、まさに「ものの逃ぐるを追はへ取るなり」というわけです。頼むことも信じることも目覚めることもできない、まさに逃げて行ってしまうような私たちが、その身そのままでもいい、そういった私たちをも追っかけてきて下さって救いとお助けくださる、これが「摂取」という言葉なんですね。

みなさん、焼香作法ってご存知ですか。一番他の宗旨と違うのは、頂くということをしらない、そのまま指でつまんでそのまま火種に持っていき、詳しいことは後程聞いてくださいね。お西では焼香を一回、お東では二回、高田派では三回、宗旨と宗派によって違うんです。ただ真宗では頂かないということですね。ですから、作法は一度確認してくださいね。

では、お聞きします。焼香や線香ってどんな意味があるんでしょうか。何のためにするんですか？もちろんお供えという意味もありますが、何のためのお供えするんでしょうか。最近ですが、100円ショップなんかで安い安い中国製の物が売っています。しかし香りというか、ものすごい匂いが悪い。お年忌の時くらいいいものを使ってください、と私は皆さんにお願いするんです。ではなぜいいものがあるのでしょうか。と言いますと、線香や香には大切な意味があるんです。線香の香りというのは基本的にすばらしくいい香りであります。お参りの部屋の扉が開いていると香りが逃げて行ってしまうこともあります。大体の場合は、閉め切っていて部屋中に香りが漂います。この漂うのは買ってきた人や用意をした人だけ嗅げる訳ではなく、お参りに来ている全ての方がこの香りを味わうことができます。そういうことなんです。つまり、阿弥陀様のお救いはすべてのものを必ず救う、ということ。その阿弥陀様の働きを表して下さるのが線香あるいはお香なんです。ですから焼香される

方だけじゃなく、用意した方だけじゃなく、全ての方に万遍なくお香の香りに遇わせてもらえます。阿弥陀様のはたらきはすべての方に万遍なく平等に働きかけてくださっていることを気付かせて下さって頂くのがこのお香のはたらきなのです。だから、阿弥陀様のはたらきに遇わせて頂くわけですから、節約等は非常に理解できますが、お香くらいはせめてお年忌くらいは少し無理をしてもいいものをお願いしている訳です。

蠟燭は智慧のひかりと言いました。「一寸先は闇」とこちらのお寺の掲示板には書かれていましたが、蠟燭は闇を照らすと言いますが、こんな逸話があります。千葉周作という方をご存じですか？幕末の剣豪、北辰一刀流の千葉周作ですね。全国を剣の修行の為に旅をしておったそうです。旅をしているうちに愛知県の蒲郡の網元のところに逗留された話が残されてあるんです。蒲郡という場所は、みなさん御存じかもしれませんが、非常に海が遠浅なんです。竹島という島があって陸の方から橋がつながっているんですが、潮がひいたりすると、歩いていけるようになるくらい遠浅なんです。ですから変わった漁の仕方があるんです。浅瀬に魚が餌を求めて集まってくる、浅瀬で餌をついばんでおると、たまにおっちょこちょいのおって引き潮になったのも気付かずに食べておる魚がおるんです。それが浅瀬にとり残される。そこで松明を持って行って闇夜で手で拾い集め取る漁の仕方があるそうなんです。千葉周作もそのことを聞いて「これはおもしろそうだ」と思って、網元の若い者たちと一緒に闇夜に松明を灯して出かけたそうです。実際、闇夜の中ですとおもしろいくらい獲れたそうです。時間を忘れて、間抜けな魚を取っていたら、今度は自分たちが間抜けになってしまった。どういうことか。ふと気が付くと、潮が満ちてきてもう腰のところまで来ているのです。ですが、真っ暗闇なのでどちらが沖でどちらが浜かわからなくなってしまった。そこで、急いであわてて松明を寄せ集めて明かりを作って探そうとしたがちっともわからない。焦っていると、千葉周作が「ちょっと待て、静かにしなさい」と言って、ある故事を思い出したんです。ある武将が敵を攻める時に浜辺を通れば背後に入れる。相手もそんなところを通ってくるなんて思っていない。しかし、真っ暗の中どう進むか。千鳥が鳴く声を頼りに浜辺を通って奇襲攻撃が成功したという故事を思い出したんです。真っ暗な浜辺に行くときは千鳥の鳴く声を頼りにした方がいい思い出したんですね。千鳥は、夜になると岩場や浜の木々で休めるんです。そこで静かにして、千鳥の鳴き声を耳を澄ますと、一方の方から鳴き声が聞こえてきて「浜はあっちだ！」とあって皆で一緒に移動して、なんとか助かることができたんですね。戻ると、若いものは千葉さんのことを褒め讃えました。そして、網元が千葉さんにお礼を言ったうえで若い者たちを叱りつけます。「千葉先生のお蔭で助かったけれども、お前たちは何年この浜に住んでいるんだ！今日は千鳥が鳴いてくれたから助かったけれども、もし鳴かなければお前たちは今頃海の底だぞ。こういったときは、松明を集めるのではなくて、松明を消すんだ！自分のまわりばかり明るくしたって、足元だけ照らしたって、何にも見えないじゃないか。松明を消すことによって、自分の周りを闇にすることによって、はるか彼方の人家の少しばかりの明かりも初めて見えるんじゃないか。それを見るためには、自分の周りの明かりを消さなくてはならないんだ！」ということ網元が若い衆に教えていたんです。このことを聞いて千葉さんは感心して、まさに自分の人生の指針を示して下さったと思ったそうです。闇であることをまず知る、闇であることを知ったうえでずっと先の光を見つけて進んでいくことが自分自身の生きる道につながるんじゃないでしょうか。蠟燭のお灯明もそうですが、少し離れたところから内陣と外陣のような距離、また少し暗いような中で、先に明かりがあってその明かりが阿弥陀様を照らして下さっていることに尊い尊い大切な意味があるんです。闇闇であることを知らせてくれるはたらきこそが智慧の光といってもいいんじゃないでしょうか。ですから、お年忌の時には電気ではなく、洋蠟燭ではなく、自然の素材で作られた和蠟燭を使って頂きたいと申し上げさせて頂きまして、智慧と慈悲のはたらきの仏様が阿弥陀仏と申し上げさせて頂いたのです。

平成 22 年 6 月 21 日